

# 徳島市庄・蔵本遺跡 95年度発掘調査概要報告書

—病棟（1期）建設に伴う埋蔵文化財調査—

1997年10月30日

徳島大学埋蔵文化財調査委員会

徳島大学埋蔵文化財調査室

## 1. 調査の概要

- (1) 遺跡の名称 徳島市庄・蔵本遺跡
- (2) 遺跡の所在地 徳島市蔵本町2丁目（徳島大学医学部附属病院構内）
- (3) 調査の契機 病棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査
- (4) 調査面積 約5000m<sup>2</sup>
- (5) 調査期間 平成7年（95年）3月27日から平成8年（96年）7月31日まで  
（16ヶ月）
- (6) 調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査委員会（委員長 武田克之徳島大学長）
- (7) 調査担当 埋蔵文化財調査室（室長 東潮総合科学部教授）
- (8) 調査員等 北條芳隆・橋本達也（総合科学部助手）、北條ゆうこ・山本愛子・新谷多賀子  
上田淑子（施設部技術補佐員）、安山かおり・辻宏幸（調査補助員）

## 2. 遺跡の概要と既往の調査

徳島市南蔵本から南庄町一帯に広がる庄遺跡は、弥生時代から奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代にかけての重層的、複合的な遺跡である。なかでも弥生時代前期前半（紀元前3世紀）の遺構や遺物には注目されるものが多く、徳島県を代表する弥生時代前期の遺跡として著名である。

徳島大学蔵本団地は本遺跡の一角に所在するが、地籍名でみた場合、校地は蔵本地区と庄地区との両地区にまたがっている。本格化し始めた大学再開発にともない、本学構内の各所で発掘調査が継続的に実施されるようになったが、調査地点をより正確に指し示すため、平成2年以降は庄遺跡の本学構内部分については本学埋蔵文化財調査室独自の判断により「庄・蔵本遺跡」と表記する方針をとっている（図-1）。

徳島大学構内では、これまでに数回の発掘調査が実施されているが、弥生時代前期前半の遺構・遺物としては、箱式石棺墓を主体とした集団墓（86年 同窓会館）、流路内に廃棄された日本列島最古の椅子（92年 医療技術短大）、幅1.2m、深さ1mの灌漑用水路（93年 酵素科学研究センター）などがある。いずれも徳島県域における最古の弥生文化の内容を具体的に示す貴重な資料であり、これら各種の遺構・遺物からみると、本遺跡を拠点とした弥生人は、従来考えられてきた以上に高度な農耕技術を携え、当時の最新の文化を享受していたことが判明しつつある。

今回の調査地は、平成4年（93年）に実施した酵素科学研究センター棟調査地の東方約200mに位置しており、その旧地形は、眉山北麓の微高地が北側へと張り出し、低湿地との境界を画する場所であろうと推定された。酵素科学研究センター棟での調査所見や地形の状況からみて、弥生時代の水田関連施設が遺存する可能性が指摘された。また本地域は徳島条里の一角に含まれていることから、条里関連遺構の検出も予測されるところであった。こうした想定のもとに発掘調査を開始した（図-2）。

### 3. 調査経過

平成6年12月に開催された徳島大学埋蔵文化財調査委員会において、病棟建設予定地の埋蔵文化財調査を本学埋蔵文化財調査室の担当のもとに実施することが決定された。ただし調査面積が格段に広く調査体制も整備されていなかったため、調査体制を巡っては委員会の開催以前から施設部と埋蔵文化財調査室担当者との間で数回の調整が行われ、外部組織からの派遣によって対処する案や、調査担当者を施工業者の調達によって賄う案も検討されるなどの紆余曲折を経た。結局、委員会において調査担当助手1名の増員が決定し、調査補助職員についても適宜拡充をはかるなどの方向性が確認されることとなり、調査の実施が可能となった。調査予定期間を当初は6ヶ月と設定し、後に設計変更による調査区の拡張等を経て、12ヶ月の調査期間が設定された。なお調査員北條芳隆は、平成6年1月から3月までの間、病気入院を余儀なくされたため、調査開始は約2ヶ月ほど遅れ、技術補助員北條ゆうこを臨時担当者として、重機掘削を3月13日に開始した。施工業者は戸田建設・森岡建設（現場代理人寺尾重治）であり、約30名の作業員を雇用して調査にあたった。

重機掘削は3月26日に終了。ただちに第1遺構面の調査を開始し、近世遺構の検出作業に入った。この間に助手1名、技術補佐員2名の採用手続きが進展し、山本愛子と上田淑子が施設部技術補佐員として4月1日付で着任。また橋本達也が4月14日付で埋蔵文化財調査室助手に着任し、ただちに調査に合流した。このほか徳島大学大学院生新谷多賀子が施工業者雇いの調査補助員として採用され、調査体制の充実がはかられた。

調査区を数区画に区別して調査を実施したために、区画ごとに調査進度には異動があるが、当初設定した区画（第1区）において近世の諸遺構の調査を終了したのは8月7日。引き続き第2遺構面の調査に着手した。この間に貯水槽敷設予定地内の調査を先行して実施したところ、弥生時代前期の大規模な用水路の発見があり、6月21日付で新聞発表を実施した（本遺構の評価は後に環濠の一部であることが判明し、平成9年9月に訂正するに至る）。8月下旬には方形周溝墓の発見があり、埋葬施設の遺存が良好であったことから精査に時間を要することとなった。11月18日にはこれら第2遺構面の成果を中心として現地説明会を実施した。この間に医薬資源研究センター新営地の調査（6月21日から9月5日）、工学部光応用工学科棟新営地の調査（8月22日から3月24日まで）を並行して実施することとなり、光応用工学科棟の調査開始以後の調査担当者は北條芳隆・山本愛子・新谷多賀子の3名体制に縮小された。

第3遺構面の調査には12月上旬から着手したが、大規模な用水路の発見に伴って多量の土量が排出されることとなり、その搬出作業に多大な労力と時間を要したために、調査の進度は次第に遅れ気味となる。この間に再度病棟の設計変更が行われ、調査区東側への拡張が通知された。その結果、調査面積は約5000㎡となった。拡張部についても第1遺構面からの掘り下げを急ぎ実施した。

第3遺構面の調査中に平成8年4月1日を迎え、契約変更と調査期間の再度延長を余儀なくされた。新たに業者雇いの調査補助員として辻宏幸、安山かおりの2名を採用することとなり、調査担当職員は再度5名の構成となる。その後、調査は順調に進展。7月6日には第3遺構面の調査成果を中心に新聞発表を行う。なお5月30日には調査区の北側の一部を施工業者に引き渡すことになり、以後は埋蔵文化財調査と本体上屋の建築工事とが並行して実施されることとなった。

その後7月上旬には全調査区の作業がおおむね終了し、排土処理の関係で掘り残した区画の調査を残すのみとなった。第3遺構面下の堆積状況の確認を含め最終の点検を実施したのち、平成8年7月31日をもって通算16ヶ月におよぶ調査を終了した。

#### 4. 調査成果

##### ① 中・近世の遺構と遺物（第1遺構面）

今調査では、水田・用水路・道路・井戸が検出された。特に今回の調査では条里地割りに沿った用水路や道路跡が発見されたため、こうした地割りの初現を解明すべく慎重に調査を実施した。本条里地割りが古代にまでさかのぼるかどうかが最大の関心事であったが、調査の結果は否定的で、検出遺構や遺物はすべて江戸時代中期に属するものであり、それ以前にさかのぼる確実な証拠は発見されなかった。出土遺物には江戸時代の陶磁器類や素焼き土器類、かんざし、古銭などがある。

##### ② 古墳時代中期の遺構と遺物（第2遺構面）

古墳時代の遺構としては東西に延びる3条の溝がある。溝内から出土した土器の型式によって、このうちの2条(SD40・SD54)は古墳時代中期(5世紀中葉から後半)頃に掘削された溝だと判断される。いずれの溝も、その断面形は逆台形を呈し、傾斜は非常にきつく垂直に近いところもある。また堆積状況を見ると、水が常時流れた形跡も見受けられない。こうした特徴からみて、これらの溝は集落内の区画溝であろうと推定される。その用途としては、屋敷地境界の明確化をはかるという意味合いをもったものか、排水等の機能をもっていたのではないかと推定される。

溝内の数箇所からは、多数の土器が炭などと共に出土した。集落内での祭祀にもちいられた後に一括廃棄されたものと考えられる。なお廃棄された遺物のなかに馬の歯が含まれていたことは特筆すべきである。歯はひとつの溝(SD43)から3箇所に分かれて出土した。この時代の祭祀には、しばしば動物を犠牲として捧げることがあったらしいと考えられているが、本資料は、こうした祭祀が徳島県域でもおこなわれたことを示す証拠のひとつといえよう。なお時期の詳細は不明であるが、調査区の東半部で発見された3基の埋葬施設は古墳時代のものである可能性が高い。このうちの1基には赤色顔料が塗布されていた(SK08)。

なお、遺物として注目されるものには古式須恵器がある(図4-3)。甕の口縁部の破片であるが、5世紀の初頭(TK73型式)に属するもので、徳島県域では最古の須恵器とみられる。

##### ③ 弥生時代中期から後期の遺構と遺物（第2遺構面）

第2遺構面に属する弥生時代の遺構としては、竪穴式住居1棟(SB02)、掘立柱建物1棟(SB03)、方形周溝墓1基(SX01)、甕棺墓1基、区画溝8条(SD44・SD50ほか)、流路2本(SD59ほか)、土坑10基が発見された。時期としては弥生中期から終末期のものが認められる。

竪穴式住居は規模の比較的大きなもので、周壁溝が認められる。出土遺物は少なかったが、床面直上から出土した甕形土器片の所属年代は弥生後期に属する。このことから当該時期のものであろうと推定した。一方の掘立柱建物のほうは高床倉庫であったと推定される。

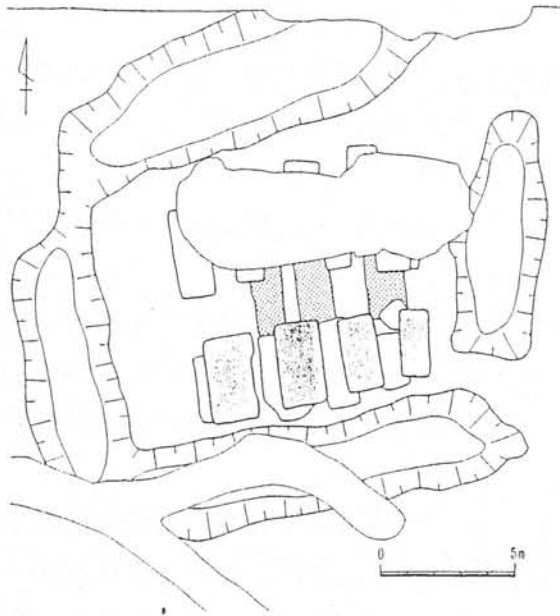
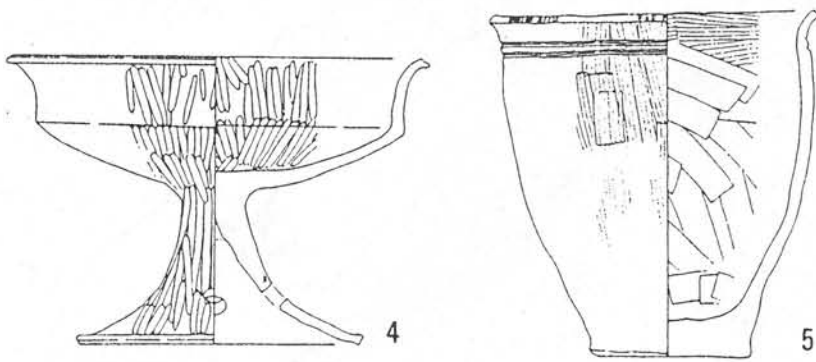
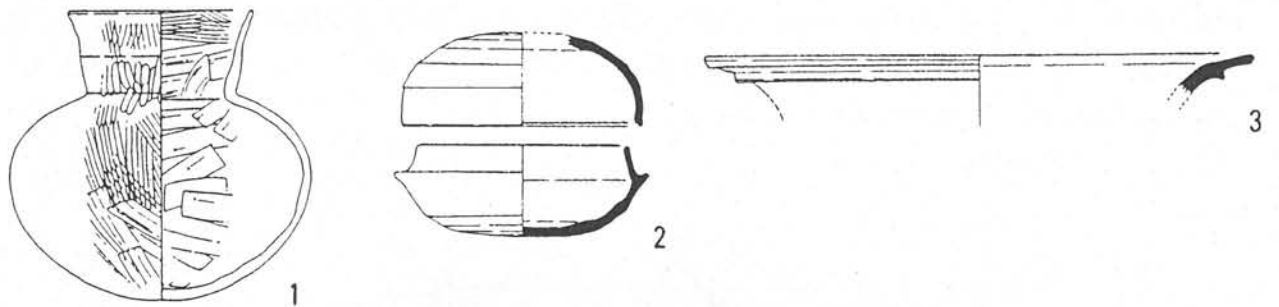
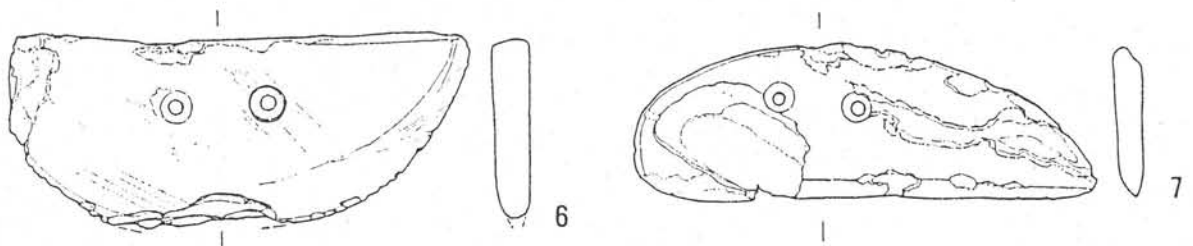


図3 方形周溝墓平面図



- 1 土師器直口壺 (SD40出土)
- 2 須恵器蓋坏 (SD40出土)
- 3 須恵器甕 (SD59上層出土)
- 4 弥生後期の高坏
- 5 弥生前期の甕
- 6 石包丁
- 7 石包丁

0 10CM



(土器は縮尺1/4、石器は縮尺1/2)

0 10CM

図4 遺物実測図

方形周溝墓は墳丘の長辺幅約10m、短辺幅7mの比較的小規模なものであったが、特記すべき特徴として、埋葬施設の依存状態がきわめて良好であった点を明記しておかねばならない。遺存した埋葬施設は19主体にのぼる(図3)。通常の調査例では墳丘部分が削平されて遺存していないことが多く、埋葬施設はみつからない場合がほとんどである。そのため、今回のような事例は当時の墓制の実態を知る上でも大変貴重な資料だといえよう。周溝内出土の高坏から、本周溝墓の年代は弥生中期後半(畿内第Ⅳ様式並行)であると推定された。

甕棺墓は大型の壺形土器と甕形土器を合わせ口にしたもので、表面には赤色顔料が塗布されており、比較的丁寧な作りである。弥生後期のものと推定される。このほか区画溝としたものは、先の古墳時代中期の溝とごく似通った規模や様相をもち、内部からは多数の土器類が投げ込まれた状態で出土した。

以上紹介した弥生時代の各遺構の配置状態をもとに、弥生後期頃の遺跡の情景を想像してみたものが図5である。異なった時期の遺構を混在させた状態であるため厳密な意味で正確とはいえないが、調査地におけるこの時代の土地利用の概況は、およそこのようなものではなかったかと推定される。中央部を浅い谷(埋没旧河道-SD61)が刻み、南北両岸に集落や墓域が展開するといった情景である。

出土遺物には多数の弥生土器類・石器類がある。(図4-4~7)。特に今回の調査では石包丁や石斧の出土数が多く、豊富な資料がえられた。

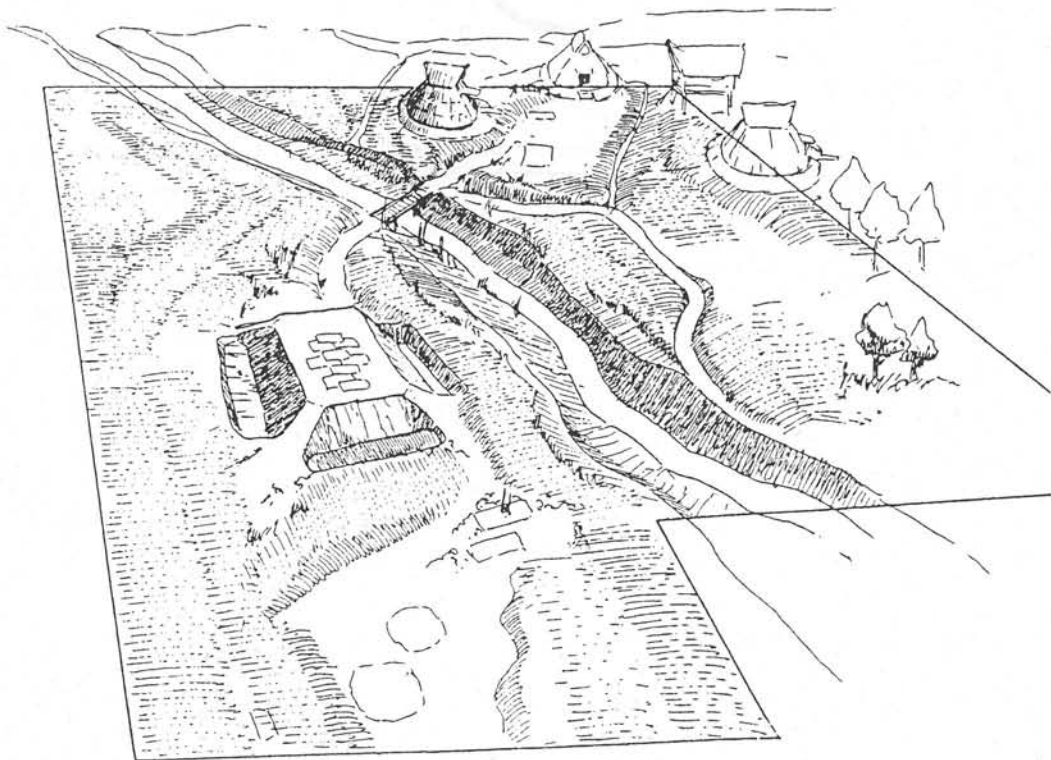


図5 病棟(1期)地区の弥生時代後期の情景(想像画)

#### ④ 弥生時代前期の遺構と遺物（第3遺構面）

第3遺構面の調査では弥生時代前期の用水路、株痕、土坑等が検出された。このうち用水路の調査成果には特筆すべきものがあるので、以下、その概要を報告する。

用水路はS D61・66・67・90・106・の合計5本が検出された（図6）。これらの用水路はすべて西から東に向かって伸びており、相互に有機的な関連性を保っていたものと推定される。主要な特徴および調査所見を列挙すれば以下のようなになる。

1. 5本の用水路は微高地と低湿地との境界部分に沿って平行に敷設されている。
2. このうち中心のS D61を除く4本の用水路は、その幅1m、深さ1m前後で、断面形は逆台形ないし半円形になるが、規模はおおむね一定している。2年前に酵素科学研究センター建設予定地の発掘調査で発見された水路（酵素研S D10）と同規模のものである。
3. 中心を流れる最大規模の用水路であるところのS D61（上面の幅5m、深さ1.5m、下面幅3m）には途中から2本の枝水路（S D112、S D113）が設けられている。これらの枝水路の規模は上面での幅約1m、深さ約1mあり、先の4本の水路と同規模である。
4. S D61から2本の枝水路への分水は、S D61の河床部に井堰を設置することによって実現されている。
5. S D61河床部検出の井堰は、矢板を長さ1～1.5m程度の範囲にわたって1列ないし2列打ち込み、これら矢板列を基礎部分の支えとして上方に横木を渡し、おそらくは筵状の編み物等を覆せていたであろうと推定されるごく簡単な構造であるが、これによって水流の一部は支流側に振り分けられることになり、枝水路への導水が行われたものと推測される。
6. 用水路相互の規模や配置状態をみると、中核的な位置にあるS D61は、鮎喰川の支流から直接取水したのか、あるいは眉山一帯からの湧水を集めたのか不明ではあるが、一帯の水田域へと導水する役目を負った幹線水路であったと判断される。他はこの幹線水路から取水し、水田の各経営区画へと水を振り分ける枝水路であったと推定される。
7. なお貯水槽地点において検出された断面逆台形の溝については、調査当時、S D61と同じく大規模な灌漑用水路のひとつであろうと推定したが、翌年度の調査（共同溝）において集落の環濠の一部である可能性が濃厚になった。そのため本例にかんし用水路としての位置づけは撤回する。

上記の所見のなかでも、特に幹線水路と枝水路とが一部平行して設置されている事実が判明した点、および幹線水路から枝水路への取水口の実態が解明された点は重要である。本地域における初期稲作農耕の灌漑システムの実態解明にむけて大きな前進があった。

なお、以上の所見にもとづいて初期水田の灌漑システムを復元するならば、おおむね次のようなものになろう。つまり鮎喰川から直接導水される幹線水路は、微地形の変化に応じて適宜区分されていたであろうと思われる単一の水田域（経営単位）に対応し、それぞれ目的の水田域へと導水されたのち、枝水路を分岐させて個別の水田区画へ水を導くといった仕組みである。個別の水田区画からの排水も、またもとの幹線水路へと導かれ、他の幹線水路へは影響を与えない。経営単位ごとに利水体系は完結していたとみることもできよう。幹線水路から枝水路を段階的に設置し、個別の水田へと水を順次配分していくといった古代以降の水田灌漑システムからみれば、投下された労働力は格

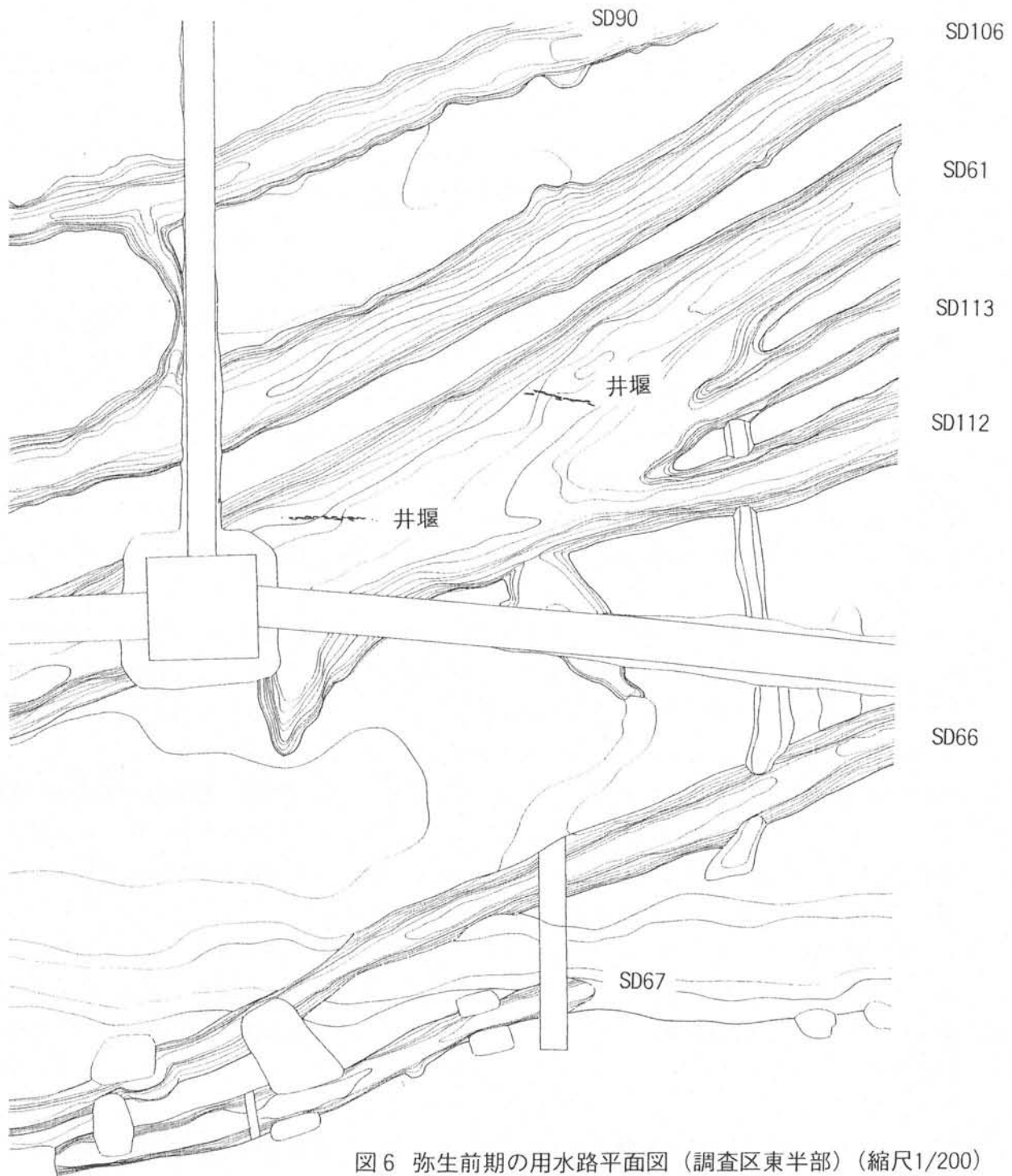


図6 弥生前期の用水路平面図（調査区東半部）（縮尺1/200）

段に大きかったと思われるが、個別の水田経営を安定させるためには、もっとも安全な利水システムだとも解釈しうる。なお用水路の周辺地帯からは多数の株痕が検出されたため、これらが稲株痕である可能性を想定し、水田遺構の検出に努めた。しかし調査の結果、水田遺構は確認されず、土壌分析の結果も芳しくはなかった。

なお今回検出した用水路群は、すべて均質な黄褐色シルト層に覆われており、堆積状態も一律でごく近似したものである。本シルト層が弥生前期末の洪水による堆積土であることは酵素科学研究センター棟の調査時に判明し、今回の調査においても大筋での矛盾は認められてない。したがって、この



所見は妥当なものともみなして差し支えない。すなわち、これら用水路群は弥生前期末の大規模洪水によって完全に埋没してしまったと考えられるわけである。

出土遺物としては、S D61から弥生前期の土器類・木器類が多量に出土したほか、河床部から炭化米の塊や堅果類の種子が出土した。そのほかS D67・S D106などの小規模用水路の各所からも弥生前期の土器類を主体とした遺物が出土している。また周辺の土坑内からは、埋甕としてもちいられた甕形土器、石器類が出土した。これらの遺物を種類別に列挙すると次のとおりである。

(1) 木器類

- a) 各種農具類 鋤・広鋤・木包丁?
- b) 狩猟具 弓
- c) その他 機織り具の部材・棒・建築材(部位不明)

(2) 土器類

壺形土器・甕形土器ほか

(3) 石器類

磨製石斧・磨製石包丁ほか

(4) その他

炭化米・堅果類の

弥生前期の遺構としては、このほかにも住居址とおぼしき柱列群、竪穴、土坑群(灰穴土坑含む)、埋甕等が検出されている。ただし現時点では未整理であり、詳細な報告ができる状態ではない。これらの遺構についての情報提示は、本報告において果たしたい。

## 5. 出土遺物の分量

本調査で出土した遺物の総数は次のとおりである。現在徳島大学埋蔵文化財調査室において保管中であり、鋭意整理作業を進めつつある。

- (1) 土器類 コンテナ540箱
- (2) 石器類 コンテナ 20箱
- (3) 木器類 コンテナ 40箱

## 6. まとめ

今回の調査によって、条里地割りの施工年代にかんする従来からの議論に改めて実証的な資料を提供しえた点は、まず特記すべき成果であるといえよう。少なくとも本調査地点では、施工時期が古代にさかのぼる可能性を見いだすことはできず、江戸時代中期の大規模造成の結果、今日に残る条里地割りの枠組みが完成したものと判断される。もとより徳島地域の条里地割り全体の解釈に本調査の所見を当てはめることは不可能であるが、実証レベルでみる限り、江戸時代の大規模造成を考慮にいれる必要性があることを再確認させられる結果となった。

弥生中期の遺構として、方形周溝墓の発見があったことも見逃せない。上述のとおり、埋葬施設の遺存状態がきわめて良好な資料である。ただし調査終了後、埋葬施設内部の土砂を洗浄したところ、複数の埋葬施設内の土中から滑石製の小玉・白玉を検出するに至った。本型式の玉類は古墳時代中期に出現することからみて、こうした事態に直面した以上、これらの埋葬施設の年代的位置にかんしては根本的な再検討を要するといわざるをえない。本報告の時点で再度所見を整理しなければならない。

弥生前期の灌漑用水路群の発見は、調査の最大の成果であったといって過言ではない。弥生時代前期における灌漑システムの概要が判明したのは、四国ではもちろん初めてであり、予想以上に大規模な灌漑施設の存在が判明したことは注目値する。本地域の初期水稻農耕文化たる弥生文化が、その成立当初、従来考えられてきた以上に先進的であったとことを物語る。弥生時代前期段階の四国における徳島地域の再評価が今後迫られることは必至である。

なお用水路の付近一帯に水田が広がるか否かの検討を詳細に実施してみたが、水田の痕跡は未確認である。堆積土壌もシルト層および砂層であり、用水路周辺は乾燥状態の土地であったとみられる。先に報告したとおり、多数の株痕を検出したのであるが、これらは葦ないし葎類の株痕であったと推定され、水田域はなお下流側に推定されることとなる。



図7 第2遺構面平面図



調査地の全景（西から）



第2遺構面検出状況  
（東から）



弥生後期の甕棺  
（第2遺構面）



方形周溝墓の全景  
(第2遺構面)



方形周溝墓の主体部



弥生前期の埋甕  
(第3遺構面)



弥生前期用水路の堆積状況



基幹用水路河床部の井堰  
(東から)



幹線用水路河床部の木器類